

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 118号

2018年 12月

菅島のエダナナフシ

エダナナフシ属に注目して探してみましよう、と本誌春号(2018;116号)で河北均さんが呼びかけていましたので、7月8日、鳥羽市菅島に行った際に調べてみました。定期船乗り場から碎石場の方向に向かい、道路わきに生えている食草のイタドリを見て回ったところ、水道タンク付近で2個体を葉上で発見しました。撮った写真を河北さんに見てもらったところ、フナシエダナナフシ *Phraortes* sp. (写真左)とエダナナフシ *P.elongatus* (写真右)でした。たしか酒席で河北さんが、フナシは海岸のイタドリ群落に生息し、エダは山地だと力説されていた記憶がありますが、両個体とも海岸からは離れた大山(標高236m)中腹の林道沿いで相次いで見つかりました。2個体の発見地点は、標高105mで、10mほどしか離れていません。もともと、島ですから沿岸部と言えなくもありませんが、このフナシエダナナフシはメスでしたので、産卵させるべく虫かごにイタドリを入れて飼育していたのですが、数日で死んでしまいました。「三角紙にいれたままでも数日で産卵します」と上述の文献にありましたが、環境が良すぎたのでしょうか。ナナフシは背丈の低いイタドリにいますので、日頃から下を向いて獣の糞や足跡を探して歩いている私の視線と合致することもあり、ちょっと興味を持ちつつあります。ご指導いただいた河北均さんに感謝いたします。



写真 左：フナシエダナナフシ♀，右：エダナナフシ♂。2018年7月8日，鳥羽市菅島町

(清水善吉：松阪市日丘町1386-17)

オオタカを恐れないカイツブリの親子

今堀聖史

写真1（2011年8月9日、松阪市曾原町の灌漑用池で撮影）をごらんください。赤色の円内にオオタカ幼鳥がいます。白色の円内にはカイツブリが3羽写っていて、真ん中の個体はこの年に巣立った幼鳥です。オオタカとカイツブリの間は3mほどでしょうか。このシーンを写したちよっぴり恥ずかしい思い込みは後に書きますが、写真を見ていただいて、オオタカとカイツブリのこれからの動きを予想してみてください。

この池は海岸堤防の陸側にあり、向こう岸まで約100mあります。撮影のきっかけは、対岸からカイツブリの警戒鳴きが聞こえ、竹やぶを越えて現れた大きい褐色の鳥が池沿いを飛んでコンクリート護岸に降りたからです。スコープで見るとオオタカの幼鳥で、近くにはカイツブリが3羽います。これは何か事件が起こりそうだとスコープにカメラを取り付け、いつでもシャッターを押せる準備をして待ちました。木陰とはいえ夏の暑気に汗がにじむ時間が過ぎていきます。しかし、オオタカは体の向きを変える程度で大きな動きはなく、カイツブリもオオタカから離れていくこともなく近くの水面にいます（写真2）。

オオタカがカイツブリを襲うだろうと予想して写す準備をしたのですが、何事もなく十数分が過ぎていきました。待ちくたびれて「なぜ襲わないのか？」と考え始め、カイツブリが近くのアオタカを恐れない理由に気付きました。カイツブリは瞬時に水中へ潜ることができるのに対し、オオタカは岸から飛び出して3m先まで飛ぶ時間がかかりますので、動きにかかる時間の差がかなりありそうです。オオタカが目前のカイツブリを捕獲できないと判断したのは正解ですが、一回くらいは飛び出して失敗してくれたらいいのに！というのが正直な気持ちでした。

このオオタカは胸から腹にかけて褐色のたて斑があり、アイリングが白いので昨年巣立った幼鳥とみられます。カイツブリを狩ることは近距離でもできないことを学んだわけですが、成鳥のように空中でヒヨドリを掴んだり、上空からカモの背後を襲ったりする能力を獲得するまで今回のような学習をいくつも重ねていくのだらうと思います。また、カイツブリの幼鳥も“オオタカの動きを見ていれば大丈夫だ”と学んだに違いありません。

カイツブリを見ているオオタカ幼鳥の不鮮明な写真は、今も印象に残っている一枚です。



写真1 狩りのシーンを期待したのだが・・・



写真2 互いに何を思う。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

シマヘビとトゲアリの交尾が撮れた

浅名正昌

シマヘビ

2018年4月22日上野森林公園で、枯れ木の幹にまわりついて交尾しているシマヘビと出会った。筆者がヘビの交尾と初めてであったのは1996年だった。そのときは、チャンスと生き込んだものの、絡んで横たわっているところが草むらで、そのうえ被写体までの距離もあったことから、作品にならないと判断して撮らなかった。だが、あのとき撮っておけばよかったと今日まで悔やんでいた。そんなことがあったか、今度こそはとの思いから撮影に挑んだ。午前10時18分から10時23分まで撮影したが(写真1)、その後もあまり変化がないのでひとまず現場を離れた。再び交尾現場に戻った10時40分、その体勢をみてヘビの情愛のすごさに驚かされた(写真2)。



写真1 幹に絡まって交尾するシマヘビ(円内は交節部)

トゲアリ

アリの交尾は、繁殖期になると雌雄とも翅アリとなり結婚飛翔で交尾を終えることから、自然界で撮影するのは困難である。そのためか、私は今までにアリの交尾写真を見たことはなかった。

2018年10月10日午前9時3分、薄曇りの自宅前の路上でうごめく小さな虫を撮影したところ、写っていたのは翅アリで、しかも交尾体勢をとっていた(写真3)。1回の交尾は30秒も続かず、オスはいずこかへ飛び去った。メスは翅を痛めていたとみえて、何回も飛ぼうとしたが失敗に終わっていた。なんらかの原因で翅を痛め、結婚飛翔からオス共々落下してきたものと考えられるが、撮影できたことは奇跡と思う。



写真2 メスが交節部を締めつけている

参考文献：熊澤辰徳2016，趣味から始める昆虫学。オーム社。

(あさな まさよし：伊賀市緑ヶ丘西町2424-11)



写真3 トゲアリの交尾

須賀利大池・小池が国の天然記念物に指定されるまでの経緯（3）

山本和彦

須賀利大池・小池が国の天然記念物に指定されるまでの経緯について、1985年から2010年頃までみてきましたが、今回は2010年から国の天然記念物に指定された2012年までについて、これまでと同様、当時の地元新聞や各新聞社の地方版に掲載された記事によりまとめてみました。

須賀利大池・小池の環境保全について尾鷲市文化財調査委員会では早くから答申し(山本 2017; 自然誌だより14・15号)、その後も天然記念物指定について議論していましたが、文化庁もこの頃から指定に向けて積極的な姿勢を示すようになります。2010年の1月と8月には文化庁から地質と植物の調査官が現地を訪れ、天然記念物の要件を十分に満たしていることを報告し、県と市に指定に向けた手続きを進めるよう進言しています。このことを受け、貴重な海跡湖とその周辺の自然環境を後世に残そうと、尾鷲市教育委員会(以後、市教委と略す)と三重県教育委員会(以後、県教委と略す)は指定に向け動き出すことになります。

大池・小池一帯の所有者は、尾鷲市、須賀利区、個人の三者があり、指定申請にはすべての地権者の同意が必要となることから、須賀利区の同意も必要となってきます。市教委は県教委とともに須賀利区の総会(2011年2月に開催)に出席し、天然記念物指定への協力を要請します。このようななか、3月8日(2011年)に開かれた尾鷲市議会で、かねてから大池一帯の国立公園指定を解除し、開発すべきと主張していた市議会議員(以後、A議員と記す)が、天然記念物指定に異議を唱えます。A議員は、以降の天然記念物指定に関する議会や委員会あるいは記者会見等で、「大池一帯は尾鷲市で企業誘致の可能性のある最大の遊休地。」と訴え、指定に反対し続けることとなります。

市教委は、大池と小池の文化財的価値を市民によりよく知ってもらおうと、まず大池、小池の自然を紹介する展示会を催します(2011年3月23~31日)。展示は、当時の尾鷲高校自然環境研究部が大池・小池で調査した成果をパネルにしたもので、海跡湖の成因やハマナツメ群落、池に生育する希少植物等のことが説明されたものでした(図1)。



図1 南海日日2011年4月20日

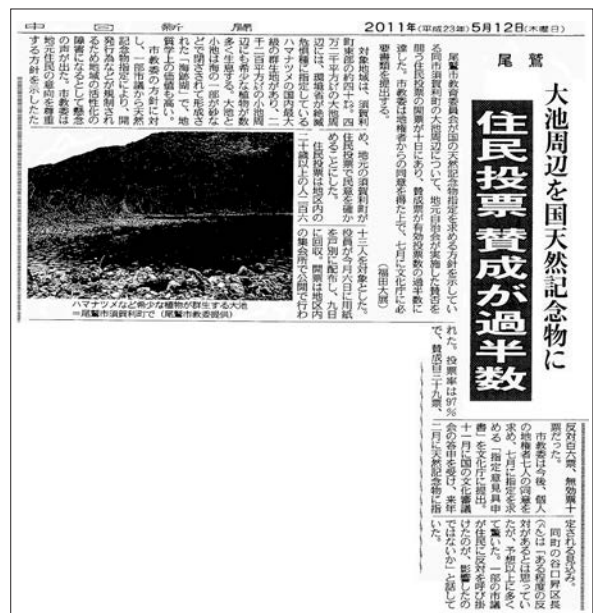


図2 中日新聞 2011年5月12日

その後、天然記念物指定に係わる勉強会が企画され、須賀利町を会場として勉強会が2回開催されました(2011年3月26日、4月23日)。この2回の勉強会では、市教委と県教委の担当者が出席し、大池・小池の成因や周辺の地形、地質について当時市文化財調査委員であった二村直司氏が、植生および植物相については筆者が担当、それぞれ大池・小池の文化財的価値について説明しています。勉強会では1回目、2回目とも約40人の地元住民や尾鷲市民が参加し、活発な質疑応答が交わされました。

この2回の勉強会の後、須賀利区は役員会を持ち、全住民262人を対象とする住民投票を実施し、過半数の賛否で決議することを決定します。住民投票は5月9日(2011年)に行われ、天然記念物指定に賛成が56%という過半数を上回る結果となりました(図2)。これを受けて、市教委は個人の地権者に指定同意を求め、「指定意見具申書」を文化庁に提出する準備が進められました。

住民投票後においてもA議員は、「大池・小池の土地は企業誘致に活用すべき」と異議を唱え、市議会や委員会等で市側との対立を繰り返します。そのような状況の中、当時の市長は、「大池一帯にはいろんな考え方もあるだろうが、豊かな自然を保護したい」とあらためて指定を強調し、7月20日(2011年)、県教委に国指定天然記念物指定申請書を提出します。これに対し、A議員は、文化庁へ反対要望書を提出するなど、市側との対立が激しくなっていきますが、11月(2011年)に国の文化審議会は天然記念物指定を文部科学大臣に答申することになります。

このように指定まで紆余曲折がありました。2012年1月に須賀利大池及び小池が貴重な海跡湖として国の天然記念物に指定されることになりました(写真1)。須賀利大池を天然記念物にという声が上がってから20年以上の時間が流れ、ようやく天然記念物に指定されたことは、喜ばしいかぎりです。(終)



写真1 須賀利大池全景(2018年2月16日撮影)

(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40)

桜咲いたか

清水善吉

みえ生物誌発行の取材を中日新聞の記者から受け、そのときに時期はずれのサクラ開花情報があったら教えて欲しいと頼まれましたが、桜といえば酒！くらいの品格しかない私が知るはずもありません。そこで(本の販売促進に協力してもらわねばなりませんので)、メールアドレスを把握している一部の会員さんに「桜咲いたか」を件名として情報提供を呼びかけたところ、各地から報告をいただきましたので記録しておきます。

以下、順不同で報告内容、受信日、送信者名(敬称略)を掲載します。なお、報告内容は一部を改変しています。報告をいただいた皆さんに感謝いたします。

①津市乙部の交差点「東橋内」から県道561号線を少し西に入ったところにある街路樹の桜(たぶんソメイヨシノ)。10/28、平山大輔

- ②松阪市殿町の松阪工業高校グランド側のサクラ。1枝の先に1房だけ開花。10/22, 中西元男
- ③鳥羽市答志町和具の海水浴場のサクラもチラホラ開花。10/21, 中西元男
- ④鈴鹿市岸岡町岸岡山の近鉄線側から登り駐車場に至る左カーブの桜。岸岡山は9月22日に展望台広場のヤマザクラ2本もよく咲いていましたが、今回はもう散っていました。10/20, 中西元男
- ⑤大紀町阿曾で昨日確認。伊勢市川端町尾崎弔堂記念館の桜も咲いているそう。10/20, 宮島美栄
- ⑥大紀町錦で確認。10/18, 宮島美栄
- ⑦ナガシマスパーランドに近い木曾岬町富田子の若い桜並木も八分咲き(写真1)。10/19, 河本実
- ⑧津市久居須賀瀬町実家付近のソメイヨシノちらほら, 鈴鹿市高岡台自宅前のソメイヨシノ50本の内3本でちらほら開花。10/19, 前川和則
- ー岐阜県からもー
- ⑨いろんな場所で咲いています。春の開花と違って、強風で葉が飛んでしまった枝に新たに葉が出てきたところにちらほらと咲いているので、よくみないと気が付きません。10/19, 高木雅紀
- ー咲いていないという情報もー
- ⑩熊野市井戸町は台風21号では最大瞬間風速49m/s, 24号では同30m/sと大荒れだったのですが、井戸川河川敷の桜並木はあまり落葉しておらず、開花も確認できませんでした。熊野灘は目の前ですが、降雨を伴っていたので、塩害による落葉もないようです。10/29, 鈴木賢

上の鈴木さんの報告にもあるように、時期はずれの開花の原因は今夏に相次いだ台風の上陸と関係があるそうです。強風や潮の飛沫を受けた塩害により落葉してしまい、サクラが春と勘違いをしたということです。まさに春のように開花した木曾岬町のサクラですが(写真1), 来春はどうなるのか興味があります。



写真1 秋の桜並木。木曾岬富田子, 2018年10月19日, 河本実・撮影。

さて、気にし出すといろいろと見えてくるもので、私の自転車コース(清水2018; 自然誌だより115号)の侍谷林道わきでも1本のサクラが満開に咲いていました(写真2)。本会の市川正人さんによるとソメイヨシノで、隣にハクモクレンも植わっていることから、植栽したものであろうとのこと。こんなところに植えた人の意図は図りかねますが、サイクリングの楽しみを一つ増やしてくれたことは間違いありません。



写真2 紅葉のなかの桜。松阪市伊勢寺町, 2018年11月25日

(しみず ぜんきち: 松阪市日丘町1386-17)

ウスグモズと村井俊郎氏

篠木善重

喪中はがきが届き、村井俊郎氏（写真1）が10月に亡くなられていたことを知った。村井氏は本会の発起人・会員でもあり、また、三重動物学会主催の観察会「鳴く虫の音を聞く会」の講師を長年続けてこられ、私も何度か参加させていただいた。また、四日市自然保護推進委員会の事務局長を長年務められ、同会主催の自然観察会でも受付・進行・講師の3役をこなされておられた。10年以上も前のことだが、私もこの観察会には足繁く通って、講師の横にくっついて自然観察を楽しませていただいた。村井氏は、ヒメジョオンとハルジオンの違いについて、毎年のごとく、その茎を折って、茎の中が空洞か否かを確認すると判別できるのだと説明されていた。しかも、姫と春の言葉から少し艶っぽいことを連想させるような内容であった。



写真1 南部丘陵公園での観察会にてありし日の村井俊郎氏（帽子に手製の鉛筆型ブローチを付けている）。2006年10月8日

2006年10月8日に南部丘陵公園で開催された観察会において、公園北ゾーンを移動中、芝生から飛び出してきたヒバリモドキ科のウスグモズ *Metiochodes genji* (Furukawa) ♀（写真2）とコオロギ科のクマスズムシ *Sclerogryllus punctatus* (Brunner von Wattenwyl) ♀（写真3）を発見して写真撮影した。ウスグモズだけは捕獲できたので村井氏にお見せしたら、「外来種で、貴重な記録となるので私が発表させていただきます」とおっしゃられたので、標本をお渡しした。その後、何度かお会いする機会があったが、その都度「標本をお預かりしておきながら、いまだ発表できず申し訳ないです」と声をかけていただいた。発表ができていない理由について氏から語られることはなかった。

あれから12年が経過した。私が見つけたウスグモズは、標本の行方は不明だが、画像を添えて自ら報告することにする。クマスズムシともども、画像を河北均氏にお送りして改めて確認の同定をお願いした。急ぎの同定を快諾していただいた河北氏に感謝申し上げます。

村井俊郎氏のご冥福をお祈りいたします。

記録

ウスグモズ *Metiochodes genji* (Furukawa) 四日市市南部丘陵公園北ゾーン、8-X。2006、1♀、篠木。

クマスズムシ *Sclerogryllus punctatus* (Brunner von Wattenwyl) 四日市市南部丘陵公園北ゾーン、8-X。2006、1♀、篠木、写真撮影のみ。



写真2 ウスグモズ♀。2006年10月8日、四日市市南部丘陵公園



写真3 クマスズムシ♀。2006年10月8日、四日市市南部丘陵公園

（しのぎ よししげ：津市河芸町中別保 2230-1）

事務局から

○「みえ生物誌」予約販売終了

二度にわたってご案内した「みえ生物誌」の予約受付を終了し、現在印刷中です。予約状況は、セット38、植物65、貝47、クモ26、昆虫Ⅰ（甲虫）27、昆虫Ⅱ（トンボ・チョウ）43、昆虫Ⅲ（バッタ・カメムシ他）39、哺乳類・爬虫類・両生類、鳥類42冊をご予約いただきました。当初は予約販売のみとする予定でしたが、印刷所が在庫管理と販売を引き受けてくれることになりましたので、各200部を印刷して定価での一般販売も行います。

○メールアドレスの登録を

本誌掲載の「桜咲いたか」でふれましたように、私が個人的にメールアドレスを登録している方には他団体のイベント情報等をときどき送信しています。未登録でご希望の方がお見えでしたら下※に「登録希望」の件名でメールいただければ次回から送信させていただきます。ただし、年に数回程度ですのあまり期待はしないようお願いします。

※shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp

○鈴鹿青少年の森湿地の整備活動のご案内

湿地植物（シラタマホシクサやモウセンゴケ類など）を守るために行う恒例の草刈り作業です。公園管理者が主体的に取り組んでくれるおかげで参加者も増えて作業がはかどるようになり、数年前に比べて格段に湿地環境が回復し、県内の湿地植物の生育地として重要な場所になってきました。当日はミニ観察会も予定していますので、ぜひご参加下さい。

日時 1月17日（木） 午後1時（道伯池南広場集合）～2時間程度

場所 鈴鹿市住吉町「青少年の森公園」

持ち物 長靴、軍手 ※参加希望の方は事務局までご一報ください。



写真 2012年の参加者（上）と2016年の参加者（下）

編集後記

山本和彦さんの「須賀利大池・小池が国の天然記念物に指定されるまでの経緯」三回シリーズが完結しました。指定までの20余年は長いようで短い、短いようで長い月日で、中心となって推進し続けた山本さんの苦労は並大抵ではなかったことでしょう。指定によって報われたことは間違いありませんが、大池畔に生育していたハマナツメという希少植物が枯れてしまうという新たな問題も生じています。このハマナツメ群落は千本を超え、全国有数の規模といわれていましたが、先日訪れたところ数本しか残っていませんでした。山本さんは沖縄西表島までハマナツメを探しに行く方ですので、ハマナツメ愛は世界一と思われます。枯死の原因が不明のなかで現状を憂いているのは間違いなく、ご苦労は続いているようです。もっとも、天然記念物指定地のことですし、同種は三重県の希少野生動物植物種にも指定されていますので、文化財保護法等の法規に沿った行政の保全対策にも期待したいと思います。次号は3月発行予定ですのでふるってご投稿ください（善）。

自然誌だより118号

発行日 2018年12月13日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp